

「花」

三岸節子

(1905~99年)

241
982年
20枚×19
0枚

三岸節子は、優しく、そしてたくましい画家でした。

最初のパートナー三岸好太郎(1903~34年)の没後、まだ幼い子供をかかえながら、画家として生きることを決めました。その後の波乱のなかでの創作もまた変化に富んでいました。

しかし、1968年、63歳でフランスに移住して20年の間に、その芸術は大きく開花したといえます。この滞仮期の作品でもこの画家ならではのスタイルがあらわれています。

モチーフは、画家が「一番好き」といって、「わが生命をこめる」といった白い花です。「悲しいとき、生きているのが堪えられぬとき、生命きりぎりのとき、白い花を描く」。まるで絵の具のかたまりが画面にくついているような作品ですが、花のかたちは白さのなかに溶けてしまっているかのようです。何度も塗りかさねながら、「わが生命を燃焼させようとする熱く清い祈りが込められています。

(田中)

名画の扉

大川美術館企画展から

